
奇跡のバット

銀河 系一朗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奇跡のバット

【Zコード】

Z01411

【作者名】

銀河 系一朗

【あらすじ】

期待されプロ野球に入団した深沢剛だが、不振のため二軍落ちのピンチ。山に籠つた深沢は、ふと訪れたバッティングセンターで老人から神の宿るバットを買ってしまう。神の宿るバットだから決して折ってはならないと、老人は深沢に特訓を始めた。

野球発祥の地、ニューヨーク。

まだ肌寒さの残る3月のゴールデンタイム。

ヤンキーススタジアムはカクテル光線で真昼のように明るく、異様な熱気に包まれていた。

ついにメジャーリーガー達が威信に賭けて総力でWBC決勝に駒を進めてきたのだ。今までのWBCはニセモノとばかりに、ロックが流れ、アメリカのダグアウトの前でチアガールが息を揃えて足を振り上げる。

観客の9割はアメリカのファンという完全アウェイ。

対するは、これまでWBCを連覇してきた、我らが侍一ツポンだ。

侍一ツポンの主砲、深沢剛は立ち止まると、アメリカメディアにもミラクルバットとすっかり有名になったグリップエンドが異様に長いバットを胸の前に立て、グリップをゆっくり回転させて、丁寧にヘッドに傷がないか眺めてから歩き出した。

ネクストバッターズゴウ フカザワ ナンバーサーティファイブ

剛がコールされると、スタンンドからブーイングが沸きあがり、日本のファンたちのカメラのストロボが煌く。

最高の舞台の右バッターボックスに、はるか海の向こうの母国から届く最大の期待を感じながら、剛は足を踏み入れる。

ほんの三年前を思い出すとすべてが夢のように思える。

そうあれは最悪だった、三年前の秋……。

ピッチャ―は胸の前でグラブを構えた。

1塁ランナーがじわ、じわりとリードをとる。

左肩越しのその視線はランナーから戻ると、バッターの剛を無視し、キヤツチャーミットに向いている。

ピッチャ―の足が上がり、マウンドから踏み出された。

マウンドの土が小さなしぶきのように舞い上がる。

ピッチャ―の肩がそり返り、後ろから回転する腕と共に一瞬に巻き戻される。

すさまじい速さで振り下ろされる腕から白球が空間に放たれた。

白球の軌道は外角、高さはウエスト。

いただきッ！

剛の腕は鋭くバットを繰り出す。

が、白球は下にぶれ始めていて、瞬間、剛のバットは底側で硬球の頭をこすった。

しまった！

走り出すが、ショックで加速もいまいちだ。

白球はボテボテのピッチャ―ゴロ。

剛が目指す1塁ベースの上で、白球は小気味よい音を立て1塁手のグラブに収まった。

小走りに引き返す剛にスタンドに陣取る味方応援団の中から野次が飛ぶ。

「へつたくそ」「あんなタマ、俺でも打つてつぞ」

ベンチから片膝だけ外に突き出し、鬼塚打撃コーチは腕組みをし

て次のバッターを見つめていた。

「すみません」

剛がそう言つて脇を通りすぎる時、鬼塚コーチはボソッと呟いた。

「深沢、来年は打順を下げるかもしけんぞ」

甲子園で「ジラの再来」と言われ、ルーキーの年は大変な期待を集めた。ホームランも最初の半年で15本打ち、一度はクリーンナップに入つたこともあつたが、オールスターでの、ここ一番での勝負弱さが出てしまい、その後、負傷退場して以来、急速に成績が落ちてしまつた。実際、甲子園でも準優勝に泣いたのだ。

ルーキーイヤーから数年が経ち、今年は下位が定着している。今、下げるという意味は一軍落ち、さらにその先にあるのは自由契約、つまり解雇通告かもしれない。

剛はシーズンオフになるや、長野のつら寂しい温泉地「阿谷木温泉」に籠つて自主トレーニングを始めた。昔、番町と呼ばれたスラッガーガーが箱根の山に籠つたと報道されたことがあつたが、球団の先輩によると、それ以外にも彼はこの阿谷木温泉を密かにトレーニングに使つていたという話だ。

この温泉、旅館は数軒しかなく、湯治場と言つた方が的を得ている。

剛は古びた旅館に宿泊し、早朝から林道を走り山に登り、旅館に戻るとひたすら素振りを繰り返す日々を送つていたのだが、ある日の夕方、湯船に浸かっていると、白髪混じりの初老の男が剛の顔を覗き込んできた。

「ありや、おめえ様、深沢選手だろ?」

「こうなると否定はできない。」

「ええ、まあ」

初老の男の声が上ずつた。

「いやあ、驚いただ。

おめえ様、甲子園ではすゞかつたもんない
剛は黙り込んだ。「甲子園では」「では」という言葉が重くの
しかかる。

初老の男も他にどう褒め言葉を探したものかと黙り込んだ様子だ
つたが、いい話題が見つからず、話の行方をカーブ旋回させた。

「昔、ほら、番長もここへ泊まつたんだに、知つてたかい？」

「ええ

「おめえ様も、山籠りかい？」

「まあ」

初老の男はニッと笑みを浮かべた。

「知つとる？この先にバッティングセンターあるぞ。行ってみたら
せ？」

「バッティングセンターですか？」

仮にもプロで3番を打つこともある自分が子供相手のバッティ
ングセンターに通うなんてプライドが許さない。

そう思いながら、湯船のお湯で顔を拭うよつにした。

男の饒舌は止まらない。

「ああ、番長が来た時はこの村は大騒ぎすら。

町長は防災無線で番長がわが村の阿谷木荘に宿泊と騒ぎ立てた
だに。

そへららせ、町長の親戚の製材所の親父が、来年は番長がテレビ
やらいっぱい連れて来たらせいいなど思つて、取らぬ狸の皮算
用でバッティングセンター作つたんだに。

そへらせ、番長はそれきり来ねえよつになつてしまつて、見
事な空振りだに、ワハハハ

「ありがとうございます、じゃあ暇があつたら

剛は話題を切つたつもりだったが、男の次の言葉に心が振り向い
た。

「なにしろ番長のために一台は時速200キロも出る器械入れたんだけど、高校生が年に何回かするぐらいで蜘蛛の糸が張つてゐるだに」

風呂から一緒に上がつた深沢は初老の男に地図を書いてもらつた。

沢沿いの道路を山側に曲がると、電動ノコギリのそれらしい甲高い音が響いてきた。

フレハブの倉庫のような建物が並んで見えてくる。

一番手前の建物の前面が開け放たれていて、少し入つたところに薄緑の作業ズボンにクリーム色のジャージの上着を着た、70歳すぎという雰囲気の男が大きな台に組み込まれた電動ノコギリに角材を押し当てて、きれいに切り割つている。奥にいる三十台くらいの男と目が合い、バットケースをぶらさげた剛が会釈すると、相手も返したが、こちらに近寄つて声をかけるでもない。

剛は作業がひと段落した頃を見計らつて声をかけた。

「すみません」

老人はずり落ちかけた眼鏡の上から、剛を向いた。

「ああ」

「この辺にバッティングセンターがあるって聞いたんですが」

「ああ、ある」

そう言つたものの、老人は再び角材を持つと、電動ノコギリで切り割つてゆく。

「あのう」

しかし、老人のひたむきな視線には剛の質問を寄せ付けない職人気質が溢れていた。

電動ノコギリの甲高い音が響き渡る。

剛は黙つて老人の作業が終わるのを待つた。

やがて老人は切り出した角材を丁寧に積み上げると、作業ズボンのポケットから鍵を取り出した。

奥にいる三十台の男に「登志男、わしは、こん方にバットティングセンター開けてくるだに」と言い残し、外に向かつて歩き出した。

剛は急いで老人の背中を追いかけ、老人は隣の倉庫の扉を開けた。

かなり天井が高い、12メートルぐらいあるだろうか。

老人が中に入り、山の林側にあたる壁際に寄つて、天井から下がる鎖を引くと、鉄の引き戸がガラガラと大きな音をたてて、陽光が差し込んだ。

杉林の梢高くに縁のネットが張られて、倉庫、いやバットティングセンターに向けてボールが転がるように裾野を広げている。その手前にピッチングマシンが三台並んでいる。

一番奥のひとまわり大きいマシンが時速200キロ出るマシンなのだろう。

反対側はバッターボックスがみつつ並び、さらにその奥には倉庫の中にもまた小さい倉庫があるような感じだ。

老人は小さい倉庫に歩いてゆくと、中から一本の長いバットを持ってきた。

剛に差し出しながら老人が言つ。

「振つてみい」

それは変わったバットだつた。
ずしりと重く、長い。

そして何よりもグリップが極端なタイカップ式というグリップで、わかりやすい言い方なら、普通のバットの柄の末端部分が10センチも無駄に伸びている、常識からすると不恰好な形なのだ。

「これはプロでも長いな」

「長さは101センチ、重さは1001グラム。わしが作った傑作だに。振つてみい」

プロ選手でも1キロのバットは殆ど使わない。

剛は一步下がってスペースを確保し、構えて振つてみた。

ヴゥーー。

通常より太いバットは風を切る音も少し低い。

いつも使つてたバットの感覚があるから違和感が残るが、見た目ほど、そのバランスは悪くなかった。

ヴゥーー、ヴゥーー。

「ほほーお、いい振りするだに」

一度、二度と素振りをする剛に、老人の顔がほころんだ。

「このバットをそんなに軽々と振るやつはおめえ様が初めてだに」「意外とバランスがいいですね」

「世間ではようバットを短く持つが、あれではグリップの止めがきかんから、バッターは遠心力でスッポ抜けるのを防ぐため無駄な握力を使つてるに違いないと思ついたずら。それでグリップ様の方が詰めてきてやつたずら」

そうか。

剛は天啓のように悟つた。

長く重いバットのメリットは、当たれば打球が遠くに飛ぶということだ。

だが、長く重いバットは重心が先にずれるので振り出しが重く遅れる。

このバットは太めの握りを伸ばした分、バット自身のバランスが手元に近くなり、その重さにも拘わらずシャープに振れるのだ。

しかし、普通のバッターにはやはり重過ぎる。

しかも内角に食い込むボールを打つ時は、伸びてる柄の部分が邪魔に感じるだろう。

これを操れるのはプロのスラッガーだけだ。

さらに、かなり時間をかけ練習して内角を打つ感覚を身につける必要がありそうだ。

幸い、自分には時間がたっぷりある。

これは運命の巡り合わせかもしれないぞ。

剛はすぐに決意して、老人に頭を下げた。

「お願いします、このバット、使わせて下さい。」

自分はこれでもプロなんです、このバットが気に入りました」
老人は腕組みをしてうなづいた。

「そへららせ、値段はこっちの言い値だに」
「はい、いいです」

相場の一、三倍でも無理しよう、剛はそう思つて言つたのだ。
すると、老人は指を三本立てて突き出した。
三十万か？ 高すぎるだ。

剛がそう思つた瞬間、老人が言つた。

「一本三千万円！」

剛は目が点になつた。

高すぎるにもほどがある。

「それは無理ですよ」

「あほぐぢりせ、何億も稼ぐプロの商道具なら安からひつ」

「しかし、自分は」

「一軍落ちを控えた身なのだ。

たしかに最初の契約金の貯金があるにはあるが、スポーツ選手の将来に全く保障はない。三千万は払うわけにいかない。それに…。

「しかし、一本三千万円で、プロが一年に何本バットを折るか知らないんですか?」

「まだあほぐぢるかい? わしの最高傑作すら、絶対、おつぼしょつては困る」

「おつぼすつ?」

「折るつづつことだに。元

おつぼしょらないよつにまず訓練するだ。練習用バットはただでやるだに

「いや、それでも折つてしまふものなんですよ。

たとえイチローさんが折らないようにして、たまに折るんですけど

「わしがコツを教えてやるだに。」

おめえに売つてやるバットは神の宿るバットすり。

思い通りにヒットが打てる、思い通りにホームランも打てるだに

「とにかく折らないよう努力してもちょっとしたきつかけで折れるもんなんですよ」

「わからんやつじやのつ。

これは練習用じゃが神棚に供えてるのは神の宿るバットだに、おめえは日本一の打者になれるだ。

おめえはおつぼしょつて天罰が当たらんよつに、神の宿るバットを必死におつぼしょらんよつ、振るだけずり

剛は困つて溜め息を吐いたが、老人はけしかける。

「このあたりの湯治場なんどで埋もれとつていーんかい? ここからトップに駆け上がつてみたらよからあず。

おめえにはそのバットを振るだけの力と素質があるだに。それだ

けでも日本に数人という勘定だに。この幸運を素通りしていいんかい？」

剛は、日比野と表札の出た老人の家に案内された。

割烹着のまま、こたつに入っていた老人の妻が、剛の180を越す長身を見上げて「ありや、たまげた」と驚いた。

しかし、それでいてすぐにのんびりとした声になつて言ひつ。

「おめえ様、お茶と野沢菜、お上がりで」

老人は妻に報告する。

「トキコ、深沢剛選手じゃ、この方が神棚のバットを買うてくれただに」

老人が剛を紹介すると、剛は焦る。

「いや、まだ買うとは決めてません」

「さつき欲しい、言うただに」

「いや」

老人は剛を引つ張つて神棚のある十畳ほどの応接間に入った。

老人は神棚に向かつて、一拍手、二礼すると小声でぶつぶつと唱え、台形の踏み台を持つてくると、それに上がって神棚に乗せられていたバットを恭しく捧げて、踏み台を降りた。

さつきの練習用よりも木肌の白いバットは見た目も美しかった。

「どうぞら？」「どうぞら？」

剛は手を伸ばしかけながら、握つたらもう欲しくなるような気がした。

構うもんか。

剛はその美しいバットを握つた。

心なしか、さつきの練習用バットより手にしつくつとくる。

神が宿るかどうかはわからないが、いいバットであることは間違いない。

そうだ。

このバットは俺を待っていたのだ！

そうだ、このバットで俺はホームラン王になる！

どうせ、一軍落ちなのだ、ここから背水の陣で盛り返すしかない。

このバットでホームラン王になつてやる！

気がつくと、剛は老人に言葉を発していた。

「お金は今週中に振り込みます」

老人はニヤと笑つた。

「練習用バットは2000本あるだに。これから特訓するだに」「はい」

剛は神の宿るバットをケースに収めると老人と応接間を出た。

湯呑みにお茶を注いで待つていた妻が言う。

「おめえ様だち、お茶と野沢菜、お上がりて」「あとにするぞ」

バッティングセンターに戻り、剛に練習用バットを渡すと、老人は一番大きなピッティングマシンに油を差して、スイッチを入れてバッターボックスの剛の横に戻つて、マシンと繋がっている端末のボタンを押した。

「とりあえず、140キロで、コースアトランダムつつう設定だに」

そう言って老人は手のひらを開いて出した。

「1万円に負けとくずら」

ピッティングマシンの代金請求らしい。

「またぼつたくるんですか」

剛が言い返すと、老人がむつとした。

「人聞きの悪いいい一、一ヶ月分だに、毎日の電気代引いたら儲けはないだに」

「一ヶ月ならまともな値段だらう。

「あ、すみません」

剛はその場で1万円を払つた。これからは毎日特訓をして、あのバットを自分の武器としなければならない。

剛が気持ちを引き締めてバッター・ポックスに立つと、老人はまるで前から自分についている打撃コーチのように指示を授けた。
「いーかい、深沢、これから2000本のバットをおつぼしょる練習をするず」

剛は意外な言葉に思わず言い返した。

「バットを折らない練習じやないんですか？」

「イチローがおつぼしょらないようにしたところでおつぼしょる、おめえもそう言つただに」

「はあ、言いましたけど」

「そいつは、どうなるとおつぼしょるかをイチローですら詳しく知らんからだに」

「まあ」

そういうことになる。

「おめえはそれでは困るだに、

神が宿るバットは一本きりしかねえぞ、絶対折つてはならんだに。

それにはどういう時に折れるか徹底的に覚える、そしてその時を絶対に避ける。

「これしかないだに」

「なるほど」

完全に納得はできないのだが、今は老人の言つことに従つてみるとかなさそうだ。

「やつてみまく」

「うん、そへらひせー、おめえはイチロー以上のバッターさ、なる
す」「う」

ピッチングマシンがボールを投げてくれる。

ふ、外角低めだ。

剛は鋭くバットを振り出し、ボールをジャストミートした。
打球はピッチングマシンの右上をかすめて、ネットに向かつ。
これはヒットだな。

しかし、老人が叱咤する。

「普通に打つんじゃダメだに。」

どういう球筋でもバットがあっほしょる振り方を探すずら。
打つんではなく、あっほしょってその悪い振り方を覚えるのが目
的だに」

剛はうなづいた。

つい、体が普通に打ち返すように反射してしまうのだ。

そりやそうだ、小学生の頃から20と何年、うまく打ち返すこと
だけを体に染み込ませてきたのだから。

バットを折る悪い振り方か……。

プロが使う木製バットは柱目と板目があり、当てる角度が限定さ
れている。強度と反発力があるのは柱目方向だけだ。バットに入っ
てるマークは単なる飾りではなく、板目の面を示している。だから
マークは決してボールに向けず、常に天か地を向けて振る。構える
時は90度旋回する前だから、逆に完全にピッチャー側に向けるが、
完全に裏を向けるのが正しい。これ以外はプロ失格の振り方、構え
方だ。

それを満たした上で、ミートする瞬間、バットの頭がピッチャー

側に向くか、キャッチャー側に向くかがバットコントロールのしび
こととなる。

しかし、今の課題はわざと折るよう振るとことなのだ。

剛は心がけてボールに悪い角度で当てようとした試みた。

ボールが放たれると、バットを振り出すタイミングを早めてみる。
当然、打撃の瞬間、バットの頭はややピッチャー側に向く。
するとボールは三遊間方向に飛んでゆく。
感触も軽いのは、反発がいい証拠だ。
やはり逆が折れやすいか。

今度はバットを振り出すタイミングを遅らせてみる。
打撃の瞬間は、バットの頭はややキャッチャー側に向く。
やはりこっちだろ？
だからといって簡単に折れはしない。
ボールは一一塁間に飛んでゆく。

後は折れる原因としてはボールとバットの中心軸がずれることがある。

あまりそれたら、かすつてチップになり、バットへのダメージは
少ない。

バットの芯を外し、もう少しダメージが大きい振り方か。

考えると、折り方はなかなか難しいものだ。

剛はいろいろと考えながら、バットの角度を変えていき、ボール
を打ち返したが、折るうとしてもなかなかバットは折ってくれない。
バットが折れた時はなんでこう簡単に折れるんだよと思うのだが、
こう折れないとい、これは折るうとするから折れないんじゃないかと
非科学的な発想が湧いてくる。

さんざん振り回して、一時間は確実に経っていたと思つ。

内角のボールが来る。

やや早めにバットを出す。

スイングは上向き、ボールはまっすぐ。

当たった場所は、ヘッドから25センチぐらい、軸より少し上。瞬間、ボールをヒットする音とバットが折れる鈍い音が重なり、きれいなヒットと違う振動がグリップに伝わった。

これだ。

ようやくバットが折れた。

剛はバットの破片を拾つと、後ろに置いてあつた大きなポリバケツに捨てた。

老人は微笑みながら新しいバットを渡して訊く。

「なんだ？ 少しは感覚が掴めたかい？」

剛は振り返るよつに目を閉じて頷いた。

「ええ、少し。

折ることを意識してるせいか違いますね。

前は、ああ、折れちゃったか、と思うだけで少しも記憶に残らなかつたけど、今、折るうと意識してみると、より細かい感触がわかりました。

といつてもまだまだという感じです」

「その調子で続けるだに。終わつたらうちで飯を食うずり

老人はそう言つと、バッティングセンターから去つた。

剛はそれからも暗くなるまで球を打ち続けた。

表の製材所で仕事を片付けていた老人と一緒に日比野の家にあがると、こたつの上には所狭しと天ぷらや刺身、焼肉など料理が並べられていた。

老人が席についていた妻と登志男につなつた。

「えれえ、おごつそ（ご馳走）だな」

鯛の姿造りは海から離れたこの山奥では特別な料理だ。

妻が答える。

「登志男が、野球のみやましい選手があいでなさつたらセー、おごつそせにやと頼んでくれただに」

老人は剛どビールで乾杯して訊ねた。

「どんだ？ 何本、おぼしょつた？」

「4本です」

球数にしたら千球を越えたと思つ、しかし、折れたバットはたつたの4本だ。

とうてい折れる感触をしつかり掴むところまではいかない。

「んま、そんなとこだな。あどおつぼしょるバットは1996本あるだに。また明日もがんばるず」

「はい」

老人は唇の上についたビールの泡を舌でなめると言つ。

「深沢、旅館ば、引き払つてうちに住めばいいずら」

「え」

「登志男が使つてた部屋が空いてるずら」

「そうだに、こんなとこだども使つてええよ。

こげな料理は毎日出せねえども、野沢菜は食べ放題だに、好きなだけ上がつてけるだ

だけ上がつてけるだ

妻は嬉しそうに言つて笑つた。

遠慮してみたものの、これから先、バットを自分の武器にするまでは少なくとも数ヶ月はかかるだろつ。

何日か話し合つうちに、結局、剛は日比野老人の家にやっかいになると決まった。

「深沢は田比野家に滞在し、ひたすらバットを折る訓練を続けた。

やがて球団からキャンプに来るよしひに携帯に連絡がたびたび入るよしひになつたが、深沢の答えは辞めたいといつものだった。そして、深沢剛の任意引退が発表された。

深沢はその後も、2000本のバットを折る訓練を続け、8ヶ月後に完遂した。

休む間もなく、今度は神の宿るバットで、自在に打つ訓練を始めた。

もちろん、剛は、はじめ、そのバットに本当に神が宿るかどうか疑問を持っていた。

科学文明の発達した現代に、そんなことがあるとは思えない。しかし、いよいよ神の宿るバットでのバッティング練習を始めるとなつて不思議なことに気づいた。

ピッチングマシンがボールを高速で投げてくる。

外角低打球

ライナーでライト方向に打ち返したいと、考える。

そこで鋭くバットを振り出すと、ボールはライト方向にライナーとなつて飛んでゆくのだ。

「おやじさん」

剛は老人のことをそう呼ぶよしひになつていた。

「なんだか、このバットは自分の思った通りに打てるんです」

剛が言つと、老人は大きく頷いた。

「言つたゞら、思い通りにヒットが打てる、思い通りにホームランも打てるず」

剛はしげしげとバットを眺めてつぶやいた。

「つまり、このバットは神の」

「ああ、神の宿るバットだに」

老人はそして付け加えた。

「だから絶対におっぽしょってはならねえだに

1年後、入団テストの当日、野手担当の鬼塚コーチはグランドに一列に並んだ志願者を何気なく眺めていた。

が、一人の男の顔に驚いた。

そこに、一身上の都合で任意引退となつた筈の深沢剛がいたからだ。

髪の毛は肩まで伸び、髭をたくわえたその顔は、以前よりぐっとたくましくなつていた。予想だにしない深沢の出現に、鬼塚は早足で歩み寄つた。

「どうしたんや、深沢！」

「ゴーチ、ご迷惑をおかけしました」

「なぜ、一度も連絡せず勝手に辞めたんや。皆、かんかんやつたぞ」「山に籠つてたんです。

どうしても一年以上の訓練が必要になつて、その長い期間を休むのは球団に迷惑がかかりますから、辞めさせてもらいました

「あほか、連絡ぐらいしいや。

んなもん、常識や、見損なつたで」

鬼塚が怒つても、剛は平然としている。

「規約を確かめたら、自分の都合で辞めた場合は球団に所有権が残るんですよ。

訓練がモノになれば恩返しする、モノにならなきやそのまま消える。

その方がいいと思つたんですね

「深沢は笑みを浮かべてしゃあしゃあと言つた。

逆に言えば、よそに行けないよ、自分の退路を断つためにわざと任意引退したとも言える。高い契約金を払つた上に勝手に辞められて怒つた球団に、再度自分を認めさせる自信が俺にはあるのだ、そう言つたげだ。

鬼塚の目が光つた。

「ふん、よほどの自信があるんやな。

権利はウチにあるかもしらんが、お前はただのテスト生の一人や。場合によつちゃ俺の一存で野球界から永久追放したるから、そう思え。

その自信、確かめさせてもらひつで」

鬼塚はスタッフに言つた。

「おう、一軍のピッチャ―、呼んで来いや。

一人、大馬鹿野郎のテスト生が来たから返り討ちにしてやるんや。そう言つ言葉は少し嬉しそうに響いた。

遠投、垂直跳び、五十メートル走と項目をこなして、バッティングのテストの時間になつた。

テスト生のバッティングピッチャ―は通常は一軍の選手が務めていたのだが、深沢の番になると、以前の同僚であり、かつて甲子園で因縁のライバルであつた、一軍エースの青山がマウンドに向かつた。

一方、深沢は、バットケースから異様にグリップエンドが伸びたバットを出して、右バッター・ボックスに入る。

甲子園夏大会決勝のシーンが甦る。

9回裏2アウト、走者2、3塁。4番ゴジラの再来と呼ばれた深沢が打てば優勝。しかし敬遠されたら5番は期待できないという場面である。

しかし、青山はキヤツチャ―の敬遠サインに首を横に振り、真っ向勝負のストレートを投げ続けた。結果、5球ファウルで粘つたものの、深沢は三振して敗れた。

おかげで、ピッチャ―青山の評価は急上昇した。

「青山、遠慮すんな、その山賊にプロの勝負球を見せたれや」鬼塚コーチが吼える中、深沢が帽子を脱いで頭を下げる、青山は頷いた。

プロではライバル同士が同球団となつたため、どちらかがトレードでもされなければ永久に可能性の消えてしまつた、あの因縁の対決が今、この入団テストで実現するとは、誰が予想しただろう。鬼塚コーチはもちろん、他のテスト生たちも固唾を呑んで、対決を見守つた。

青山が足を跳ね上げ踏み出し、反り返つた肩の後ろから一気に腕を振つて速球を投げ込んだ。

速い！

まだ寒いこの時期によくこんなにスピードが出せるものだと感心する、ベストナイン投手ならではのストレートだ。

球は外角の低目に突き刺さる勢い

センター、ライナー

剛は一瞬に打球の飛ぶ方向をイメージする。

次の瞬間、深沢のバットが、まるで舞い降りる鷹の爪のように鋭くボールを捉えた。

カーン！

どよめきが起きた。

ボールはライナーの弾道を描いてセンターの柵の向こうに消えた。

「すげえー」「まじ鋭いぜ」

テスト生たちは自分たちがテストを受けに来ていることも忘れて、因縁の対決、第一球に勝利した深沢のバッティングに酔つた。

次の投球は対角の内角低めのストレート。

レフト、大フライ

深沢は今度はゴルフスイングで打ち返した。

カーン。

「オー」という声が湧き上がる。

ボールは大きな弧を描いてレフトの柵の向こうに消えた。

次の投球は真ん中から落ちるフォーカク、さすがに今度は変化球でタイミングをずらそうというわけだ。

一二塁、ゴロ

深沢は惑わされることなく、叩きつける。

打球は鋭いゴロで一二塁間の方向をすり抜けた。

その後も緊迫の対決が続き、やがて、

「よおし、ええやう!」

鬼塚コーチが言つと、青山は深沢に駆け寄つて握手した。

宿命の対決は10球行われ、樋越えが5本、外野フライが2本、ゴロが2本、空振りが1本。

「負けた、完敗だ、どえらい怪物になつて帰つてきやがつたな」

甲子園のライバルの褒め言葉に深沢は照れ笑いを浮かべた。

青山は笑顔を深沢に向けたまま、鬼塚に向け大声で叫ぶ。

「「一チ、こいつは合格にしてウチで飼い殺しにしてください。
こんなやつがよそのチームに入ったら、ピッチャーはたまつも
んじやない」

鬼塚「一チは手のひらを上げて苦笑いした。

任意退団の時は深沢を5行で片付けたスポーツ新聞が、あれから
1年数ヶ月で主砲の地位を不動にした深沢について、今度はことある「」とに一面、カラー写真入りで扱った。

深沢、連日のアーチ、奇跡の復活！

帰ってきた怪物深沢、連続本塁打記録更新！

深沢、驚異的な打率 早くも優勝見えた！

華々しいタイトルが踊る。

前半戦の打率は5割8分2厘、本塁打は21本をマーク。
当然、オールスターにも選ばれ、MVPに輝く。
後半戦も打率、打点、本塁打数の三冠王を取り、チームは優勝。
日本シリーズにも優勝した。

その翌日、深沢は2ヶ月ぶりに日比野老人に電話をかけた。

『おやじさん、『』無沙汰します、深沢です』

『おお、二冠に続いて日本一かい、おめでとう』

『ありがとうございます。神の宿るバットのおかげですよ』

『ああ、おめでもつまくバットを守つたまう』

『そりやあ、折つたらおやじさんに半殺しですか』

剛が言つと、老人は笑つた。

『ははは、空振りはそつずらな?』

『半分ぐらいはそつです、バットが折れそうなコースの時は、ヤマ
が外れたふりをして空振りしました。

それをこまかすために打てるコースも時々、空振りして、俺の最
大の弱点を見破られないようにしてます。

あと本当の空振りも一、二割近くありますが』

『んん、うまい』とやつとるだ』

『おやじさんは名前出さなくていいんですね?
またバット作りで儲けられるかもしねないのに』

『いや、俺はもう引退だに、おめえのバットが大活躍して、これ以
上ない光栄だで』

『おやじさん、本当に感謝します』

『そんなことより、来年はＷＢＣがあるだに』

『そうですね、選ばれたら頑張ります』

『選ばれるのは決まりずり、おめえよりす』』バッターは世界中探してもいねえだに』

『なんか夢みたいですよ、そこ温泉に行く時は地獄行きみたいな気分だった』

『わはは、人聞きの悪いいい、旅館のもんが聞いたら泣くぞり』

『あ、すみません』

剛は頭を掻いた。

『そへらじせー、世界一になつてくれよ』

『は、はい、なります、きつと』

剛は日比野老人に世界一を獲ることを約束した。

そして、今、剛は、WBC決勝戦の舞台に立っているのだ。

今回のWBCは今までと違っていた。大リーガーを参加させるために優勝賞金が跳ね上がり、ようやくアメリカが本気モードに入つたのだ。本気のUSAは全戦全勝であつといつ間に決勝戦に駒を進めてきた。

侍二ヶポンも他を寄せ付けない強さで決勝に勝ち進んだ。

中でも剛の高打率、多本塁打、高得点の打撃は群を抜いて光っていた。

熱狂の完全アウェイの中で始まつた決勝戦の先発ピッチャーは日本が松坂、アメリカはクリフ・リーというヒース同士で、甲乙付けがたい素晴らしいピッチングを披露した。

2回の剛は2塁打を放つたが、後が続かなかつた。

4回の剛は三振した。神の宿るバットを守るために仕方ない三振だった。

5回までは日米共にピッチャーの好投に無失点に抑えられていた。

しかし、6回表、松坂の握力がやや翳りを見せると、どこから切つてもメジャーのクリーンナップと、いわば金太郎飴状態のアメリカ打線がついに火を吹いた。

先頭打者がホームラン、続いて、2塁打、1塁打、犠牲フライで一点追加。

次が三振も、五番手がまたヒットで一点追加。

後続を討ち取つたが、3点の差がついた。

その裏、侍二ツポンの攻撃は剛からだ。

剛が右バッターボックスに向かうと、ブーリングが飛び交い、カーメラのストロボが煌く。

左腕クリフ・リーは、ストレート、カーブ、チェンジアップと球種は少ないが、コントロールして低めに丁寧に投げてくるので、日本受けしそうなタイプのピッチャーだ。

しかし、スピードは驚くほどではないから、そろそろストレートは長打できるはずだ。

ランナーがないのが勿体ないが、ここはホームランを打たせてもらひ。

剛は神の宿るバットを後ろに引き、こつもかづするよじで少し寝かせて構えた。

リーの右足が巻き上げられ、左腕が唸つた。

外角低め

初球ストライクを取りに来た

ストレート！

ライト、大フライ、

素早くイメージして、剛は一瞬の間合いを取り、鋭くバットを繰り出した。

カーン、

バットの軸とストレートが一点で出会い、小気味よい音が響いた。

白球はみるみる高度を上げて遠ざかり、ライトスタンドを埋めているUSAファンの中に飛び込んだ。

線審が頭の上で、くる、くるりと拳をまわす。

どよめきがスタンンドをゆらした。

日本のベンチから歓声が湧き上がる。

剛はゆっくりと一塁を回り、日本のベンチを振り返りガッツポーズをした。

見ると、USAファンにも立ち上がりつて拍手してくれるやつが何人もいる。

敵チームでもいいプレーは賞賛するところファンマナーが出来て

いるのが、嬉しい。

剛のホームランで3・1と2点差に詰めたものの、後続の得点はなかつた。

7回表のマウンドは松坂に替わって青山が向かつた。

青山はマウンドからセンターの剛を指差して、自分を指差した。あいつ、次のヒーローは俺だつてアピールしてやがる。

剛は笑いながらグラブを叩いた。

青山はいきなりフォークで2番ペドロイヤの打ち氣を逸らし空振りをさせると、素早いテンポでストレートを続けて、あつという間に三振を取つた。

続くラドウェイックはスライダーでイチローへのイージーフライだ。4番ジョーンズはストレート、フォーク、シュー、フォークで空振り三振と、三者凡退に切つて取つた。

剛がベンチに引き上げて「ナイスピッチン」と声をかけると、青山は「もう一発でかいの飛ばしてくれよ」と笑つた。

7回裏はアメリカも中継ぎ投手にダウニングを繰り出し、日本は8番岩村と1番イチローがヒットし、1、2塁のチャンスを作つたものの、得点には至らず。

8回表、7回に続いて青山が気迫のピッティングを見せていたが、やや甘くなつた球をバークマンにホームランにされて1点を献上、それでも氣を取り直し後続を断ち切つた。

4・1とされた8回裏は1アウトの後再び剛がバッターボックスに入った。

ピッチャ―はジョー・ネイサンがコールされた。USAの総力戦の意気込みが伝わってくる。

身長190センチを超える巨漢のネイサンがマウンドを踏み慣らし投球練習が始まる。160キロ近い速球、続いて140キロそこそこのカーブ、緩急の差が大きい。

「あいつらは心の底ではストレートこそがキングだとまだ思い込んでるんや。深沢、打てそうだと思うたら、ストレートを打ち崩したれや。やつらのプライドを揺さぶるにはその方が効くんや」鬼塚コーチは剛にそうアドバイスした。

剛は神の宿るバットを後ろに引き、少し寝かせて構えた。ネイサンの上体が前進し、高い位置から右腕が振り下ろされた。

真ん中低め

スピードが乗っている

ストレート！

センター、ライナー。

剛は、鋭くバットを繰り出すが、タイミングが一瞬遅かった。空振りだ。

スタンドから歓声が上がる。

剛はいつたんバッターボックスを外して、今のスピードを頭の中で再現する。

よし、次は大丈夫だ。

剛は頭の中でスピードのイメージを繰り返しながら、バッターボックスに入り、神の宿るバットを構えた。

2球目、今度は遅い。
低すぎるカーブ。

剛は完全に止まつて見送つた。

3球目、外角高め

スピードが頭の中のイメージと一致する

ストレート

ライト、大フライ。

剛は鋭くバットを振つた。

カーン

またやられたかとスタンンドのアメリカ人たちが静まり返る。行つたか？

剛は数メートル駆け出しながらボールの行方を見つめる。高度を上げた白球は落下を始めている。

それを目指しライトのラドウイックが走る。

白球はスタンド手前の塀にぶつかつて、グランドに転がつた。

剛は1塁ベースをまわり、加速する。

ラドウイックがボールを捕まえ、投げる。

剛はスライディングして2塁ベースに立つた。

喝采を送る日本ベンチに拳を突き上げて答える。

次の打者5番稲葉の時、ヒットエンドランのサインが出た。

剛はピッチャーネイサンの投球と同時にスタートする。

稲葉は一二塁間を狙いすましたような強いゴロを打つた。

打球がライトに向かうといひで、剛はゆづゆづとホームを駆け抜けた。

これで4-2だ。

この後、稲葉は牽制で刺されて攻撃が終わる。

9回表は杉内がリリーフに立つた。

鋭いスライダーとカーブでコーナーを突き、ジョーンズにヒットを許したものの、ジーターを併殺に仕留めて、無得点に抑えた。

いよいよ、9回裏、4-2から日本の攻撃。

アメリカはクローザー投手としてパペルボンを送り込んだ。侍二ツポンは少なくとも2点取らなければ、アメリカに敗北する正念場だ。

しかし、逆に3点を取れればサヨナラ逆転優勝が舞い込む。

7番小笠原は粘つた末に執念の三遊間ヒットで出塁。

残念ながら8番岩村は、9番里崎は、凡退して2アウトのピンチ。そこで、1番イチローはピッチャーの頭上を抜けるヒットで、ランナー1、3塁と大きくチャンスを広げた。

ここで2番中島がセンター前にライナーを飛ばし、これで3塁走者小笠原がホームインし、4-3と1点差になり、日本ファンが大騒ぎとなつた。

3番青木はサードの右を抜くかというゴロだった。しかし、サードジョーンズはボールに飛びついでよく止め、イチローに睨みを効かせ1塁に送球したもののセーフ。

2アウト、満塁というお膳立てで、剛に打順が巡ってきた。ホームランはもちろん、長打を打てばサヨナラ逆転優勝だ。

ネクストバッターズ ゴウ フカザワ ナンバー サーティファ
イブ

カメラのストロボが煌く中、剛がコールされると、スタンドから一斉にブーイングが沸きあがる。

剛はいつものように神の宿るバットを立て、グリップをゆっくり

とまわしてヘッドをチェックしてから、右バッター・ボックスに入つた。

パペルボンがグラブの中で、球を握り直し、剛はバットをやや寝かせ氣味に構える。

パペルボンが左膝を胸まで引き付け、右腕をテークバックする。剛の吸氣はそこで一瞬止まり、パペルボンの右手が伸びて、白球をリリースするとこりで静かに吐き出し始める。

外角ウェスト

スピードは8回のネイサンと同じくらい速い。

ライト、大フライ

剛はバットを繰り出すが、微妙なキレにチップにさせられる。スタンドから大歓声が上がった。

剛はバッターボックスを外し、コーチを見て、サインを確認する。特に指示はない。

アメリカチームは、外野はバックホームに備えて前進守備、内野は間を抜かれないようやや深めの守備体勢だ。

再び、右バッターボックスに入ると、スタンドからUSAコールが湧き上がる。

「USA、USA、USA、USA」

さらに足まで踏み鳴らすので、すさまじい音量だ。

パペルボンが再び、左膝を胸まで引き付け、右腕をテークバックする。

パペルボンの右手が伸びて、白球をリリース。

またも外角ウェスト

初球の勝ちで調子に乗つてゐる。

そうはいくか。

ライト、大フライ

剛は鋭くバットを振り抜いた。

カーン

打球音と共に一瞬の静寂、そしてどよめき。

ライト線審が体の右側に腕を突き出し、ファールだ。

2ストライクに追い込まれた。

もう1球ストライクならアメリカの優勝だ。

「USA、USA、USA、USA」

さらにUSAコールが大きくなる。

剛はバッター ボックスを外し、バットをまわして見つめた。

神の宿るバットよ、今こそ、俺にホームランを打たせてくれ。

「USA、USA」の声が降りかかるて来る中、剛は心中で祈つた。

地鳴りのような歎声が続いている。

「USA、USA、USA、USA」

3塁ベースから一步離れたイチローさんが何か叫んだ。

フィールドでは絶対冷静なイチローさんが叫ぶなんて初めて見た。

圧倒的なUSAコールで声が届く筈はなかつたが、剛はイチロー

さんの口の動きが「頼んだぞ」と声を発したと直感した。

ペペルボンが再び、投球動作に入り、右腕をテークバックする。
ペペルボンの右手が伸びて、白球をリリース。

バットに危険な内角高め

コースはストライク

やられた

ここは空振りで逃げるわけにはいかない

打つたからといって必ずバットが折れるわけではない筈だ。

剛は一瞬のうちにバットを守ることより、スラッガーの本能に賭けた。

ライト、ライナー

カーンという音に、一瞬で鈍い音がかぶさった。

バットを折る訓練の時に味わったあの衝撃が伝わった

神の宿るバットはグリップの上8センチあまりで無残に二つに折れてしまっていた。

絶対折ってはならない、神の宿るバットが折れてしまった。

放心

あまり勢いのないボールは一二塁間めがけて転がってゆく。イチローさんが早くも壘の中間地点までダッシュして何か怒鳴っている。

剛は我に返り、急いで一塁に向け駆け出した。

まだ、勝つ可能性がある

自分がセーフなら、まだ可能性が、

やや後方に位置していた2塁手ペドロイヤが猛ダッシュして、口に飛びっこうとしたが、運よくグラブの先端で弾いて、もたついている。

剛は1塁ベース目がけ加速した。

もうイチローさんは本壘を駆け抜けた頃だが、自分が1塁セーフにならなければおしまいだ。

剛は滑り込むのではなく、アメフトの選手のように思い切り1塁

にダイブした。

2塁手ペドロイヤからの送球が1塁手バーカマンのミットに収まる。

万事休すと思われた、その瞬間、ミットから白球がこぼれた。剛のダイブを腰に受けて、1塁手バーカマンが倒れたのだ。

1塁審が両手をサーツと広げた。

セーフ！

日本ベンチから歓声が上がった。

やつたぞ、

そう思つて剛が立ち上がると、主審が駆け寄ってきた。
何か怒鳴り、拳を振り下ろす。

一転、アウト？！

主審は剛に向かって何かまくしたてた。

剛は首を横に振つたが、主審が剛の手を指したのを見て、意味がわかつた。

剛はショックのまま折れたバットのグリップを放すのも忘れたまま、1塁にダイブしていたのだ。実際にそれが1塁手に当たつたわけではなかつたが、その行為が凶器による守備妨害にあたると判定されたようだ。

アメリカチーム全員が人差し指を突き上げ、雄叫びを上げてマウンドに集まつた。

「USA、USA、USA、USA」

USAホールが球場を満たしてゆく。

その場に座り込んだ剛は折れたグリップだけを握りしめ、神の宿るバットを折つたショックに改めて見舞われていた。

おしまいだ

このバットが折れた瞬間から、俺は一軍行き決定だ。

剛は神の宿るバットを失ったショックに、もはやインタビューヒ
答える気力もなく、日本に帰った。

そして真つ先に、日比野のおやじさんに謝るために、阿谷木温泉
の土地を訪れた。

おやじさんに、自分のためにもう一度神の宿るバットを作つても
らえたら。

それが、今の剛に残された、かすかな希望だ。

日比野の表札の玄関を開け、奥に声をかける。
「こんちは、深沢です」

するとおやじさんの妻のトキコさんが現れた。

「おめえ様、ようこらつしゃつただに」

「はい、『無沙汰してました。

』主人は作業場ですか？」

「そへららせ、奥に上がりて下せえ」

割烹着のトキコさんは居間の奥の小部屋に剛を通した。

そこには灯籠が薄い明かりを灯台のように放ち、蓮の花が飾られ、
剛が何事かと仏壇を覗くと、そこにある眞におやじさんが納まつ
ていた。

「えつ」

剛は心臓が止まりそうに感じた。

「十日ほど前、急に具合が悪くなりして、おえただに」

「そ、そんな」

おやじさんの急死で、かすかな希望も完全に潰えた。

剛はこたつでお茶を出されて、トキコさんからおやじさんの最期
の様子を聞かされた。

「まれ、いのめえ、テレビでおめえ様が満墨本墨打打ちなさった日、満墨本墨打といえば韓国に勝つて決勝ラウンド行きを決めた時だ。あのしょも喜んでなさったのが、トイレスを行つた帰り、廊下で急に横になつての。

おねげさなイビキかいて寝てしまつただに。
こたつまで引っ張るうとしても重うて動かんだけ。
困つてふとんばかけてしばらくおいたずら。
夕方に登志男が顔出しつゝ、こつや救急車呼べやつて、大騒ぎしただ。

病院の中でそんまま眠つたまま、おえただに、「

トキハさんは野沢菜を箸でつまみながら、ふと思ひ出したようだ。
「そう言えぱよ、おめえ様に手紙は書いてあつただに。
わしになんかあつたれば、渡すがよからずと言つてたずら」

トキハさんは居間の茶箪笥の引き出しから封筒を取り出すと、剛に渡した。

剛は封を切ると、おやじさんガ鉛筆で書いた手紙を読み出した。

拝啓

深沢殿

今までバットば作つても名の知れなかつたわしが、近頃は、お前様の活躍のおかげで、鼻高々で過ごせて、幸せの限りだ。
まつこと感謝してるだ。

さて、お前様に謝らんこやなうことがひとつあるだよ。
他でもない、神の宿るバットのことだて。
ありやあ、わし、大嘘こいただ。

出来上がったバットの中で一番見ばえ良いのば、されこそ磨いて
神棚を飾つといただけずら。

お前様、自分で思つた通りに飛ぶ、まわじく神の宿るバットじや
言いなさつたが、

それはお前様があつぼしよる練習ば通して、神のじときバット操
縦をば掻んだからに違ひねえとわしは思ひず。
つまるど二、あれに神は宿らんが、お前様の手が神に近づいただ。
しかし、いかに気をつけても、いつかは折れることもあるうづ。
その時のために、仏間の押入れの中に桐の箱があるず。その中に
10本ばかり同じバットが取つてあるだ。無料サービスしつぐだに、
また使つてくれればええずら。

日比野 一往

手紙を読み終えた剛は「おやつ、さん」と呼びかけた。

いいや、確かにおやじさんの作つたバットには神が宿つていたん
だ。

それが俺に力を与えてくれていたんだよ。

剛は、心の中でそう返しながら、堰を切つたように溢れ出る涙を
止められなかつた。 了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0141i/>

奇跡のバット

2010年10月8日15時56分発行